

40406

教科書文庫

4
110
31-1933
2000.9 18266

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

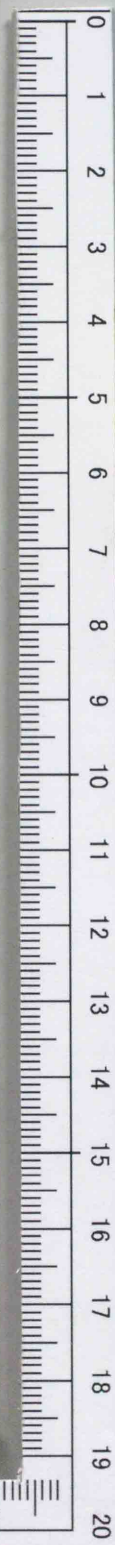


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



教科書文庫
4
110
31-1933
2000018266

複式編制學校
第三四學年
兒童用乙
尋常小學修身書

文部省



教科書文庫
4
110
31-1933
2000018266

資料室

3759
Mo14



尋常小學修身書

複式編制學校
第三四學年
兒童用乙

文部省

広島大学図書
2000018266




もくろく

第一	おやのおん	一	第十四	皇后陛下 <small>みわごう</small>	二十九
第二	かりかり	三	第十五	皇堂をたつとべ <small>みわらう</small>	三十一
第三	兄弟	五	第十六	能久親王 <small>とくだひしんのう</small>	三十四
第四	仕事にはげめ	七	第十七	ちゆうくんあいこく	三十七
第五	しんるゐ	九	第十八	やくそくをまもれ	四十
第六	がくもん	十一	第十九	あやまちをかくすな	四十二
第七	友だちはたすけあへ	十三	第二十	おんをわすれるな	四十三
第八	身體 <small>しんたい</small>	十五	第二十一	法令をおもんぜよ <small>ほうれい</small>	四十六
第九	めいしんにおちいるな	十七	第二十二	共同 <small>きゆうどう</small>	四十八
第十	よい習慣をつくれ	二十	第二十三	こりえき	五十
第十一	そせんをたつとべ	二十三	第二十四	じぜん	五十四
第十二	ぎやうぎ	二十五	第二十五	よい日本人	五十六
第十三	人の名譽をおもんぜよ <small>めいよ</small>	二十七			

複乙三四

教育ニ關スル勅語

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ
德ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克
ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セル
ハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實
ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦
相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及
ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ徳器
ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲
ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉

シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キ
ハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ
爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン
斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫
臣民ノ俱ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬
ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト俱ニ
拳々服膺シテ咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

明治二十三年十月三十日

御名 御璽

第一 おやのおん

にのみやきんじらう
二宮金次郎の家は大そうびんぼふであつた
ので、父母は金次郎たちをそだてるために、い
ろいろくらうをしました。

ある時父がびやうきになつて、おいしやにか
かりました。父はくすりのおれいが出来ませ
んのので、しかたがなくでんぢを賣りました。び
やうきがなほつてから、父はおいしやの家へ
おれいに行き、その金を出しましたが、おいし

やは氣のどくに
思つて、うけ取り
ません。父はおい
しやのしんせつ
をよろこび、しひ
てそのはんぶん
をおいてかへり
ました。その時金次
郎はかど口に出て父



復乙三四

復乙三四

のかへりをまつてみました。父はうれしさう
なかほをしてかへつて来て、金次郎においし
やのしんせつをはなして聞かせ、「これでおま
へたちをそだてる。ことが出来る。」といひまし
た。

父母ノオンハ山ヨリモ高く、海ヨリモフカ
シ。

第二 かうかう

金次郎は小さい時から父母が自分たちをそ

だててくれるくらうを思ひやつて、よく父母の手だすけをしました。

金次郎が十四の時、父がなくなりました。母はくらしにこまつて、す急の子をしんるゐへあづけましたが、その子のことをしんばいして毎ばんよくねむりませんでした。金次郎は母の心を思ひやつて、「私が一しよけんめいにはたらきますから、弟をつれもどして下さい」といひました。母はよろこんでそのばんすぐに



しんるゐの家へ行つて、あづけた子をつれてかへり、おや子一しよにあつまつてよろこびあひました。

孝^{カウ}ハ徳^{トク}ノハジメ。

第三 兄弟

それから金次郎は少しのじかんもむだにせず、

よくはたらい
て弟たちをや
しなひました。
金次郎は朝は
早くから山へ
行き、しばをかり、た
きぎを取つて、それ
を賣りました。又夜
はなはをなつたり、



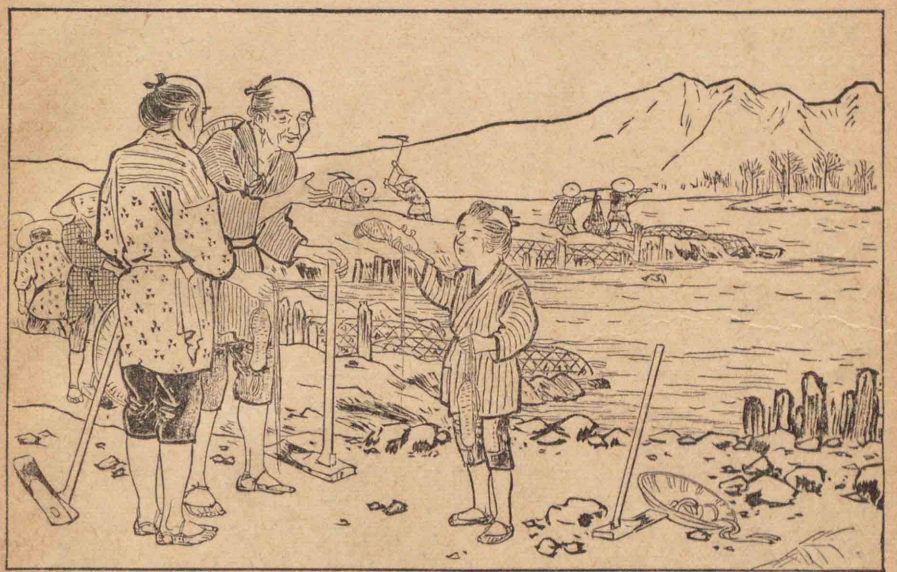
復乙三四
復乙三四

わらぢを作つたりして、おそくまではたらき
ました。

兄弟ハリヤウ手ノゴトシ。

第四 仕事にはげめ

金次郎は十二の時から父にかはつて川ぶし
んに出ました。仕事をすまして家へかへると、
夜おそくまでおきてゐて、わらぢを作りまし
た。さうして、あくる朝そのわらぢを仕事場へ
持つて行つて、私はまだ一人前の仕事が出来



ませるので、皆様のおせ
 わになります。これはそ
 のおれいです。』といつて、
 人人におくりました。
 その上、金次郎は人人の
 やすんでゐるひまにも、
 土や石をはこんで、力の
 かぎりはたらきました。
 それでかへつて、おとな

復乙三四

復乙三四

よりもたくさん仕事をしたと申します。

第五 しんるゐ

金次郎が十六の時、母がびやうきにかかりま
 した。金次郎は大そうしんばいしているいろ
 かいはうしましたけれども、とうとうなくな
 りました。金次郎はたのみにする母にわかれ、
 二人の小さい弟と後にのこつてどんなにな
 げいたでせう。

やがてしんるゐの人たちがよりあつて、「三人

のものが大きくなるまで、わけてあづかることにしよう。とさうだんしました。それで二人の弟は母のさとに引取られ、金次郎はまなべとといふをぢの家へ行つて、せわになりました。

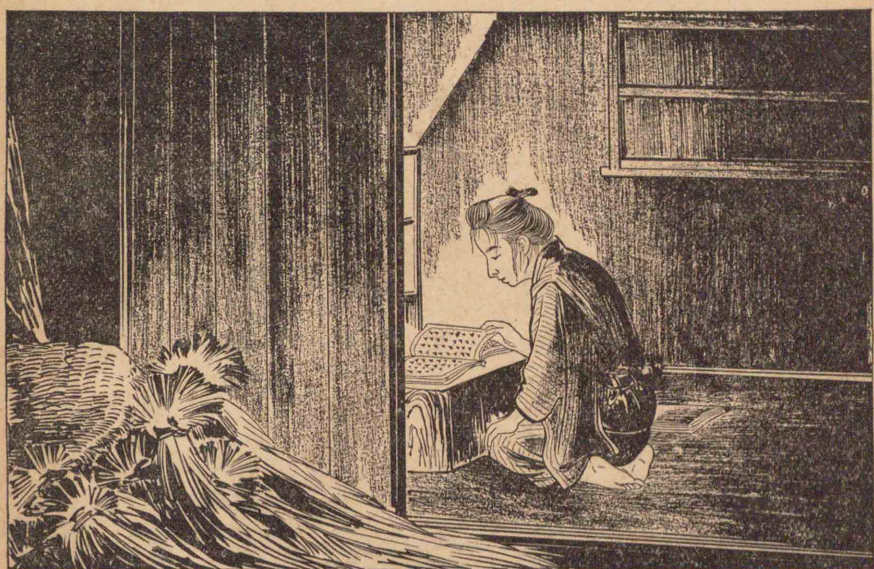


複乙三四

第六 がくもん

金次郎はよくをぢのいひつけをまもり、一日はたらいで、夜になると、本をよみ、字をならひ、さんじゆつのけいこをしました。をぢはあぶらがいるのをきらつて夜學をとめましたので、金次郎は自分であぶらなを作り、そのたねを町へ持つて行つてあぶらに取りかへ、毎ばんべんきやうしました。をぢが又「本をよむよりはうちの仕事をせよ。」といひましたから、金

次郎は夜おそくまで家の仕事をして、その後でがくもんをしました。金次郎は二十さいの時自分の家へかへり、せい出してはたらいて、後にはえらい人になりました。



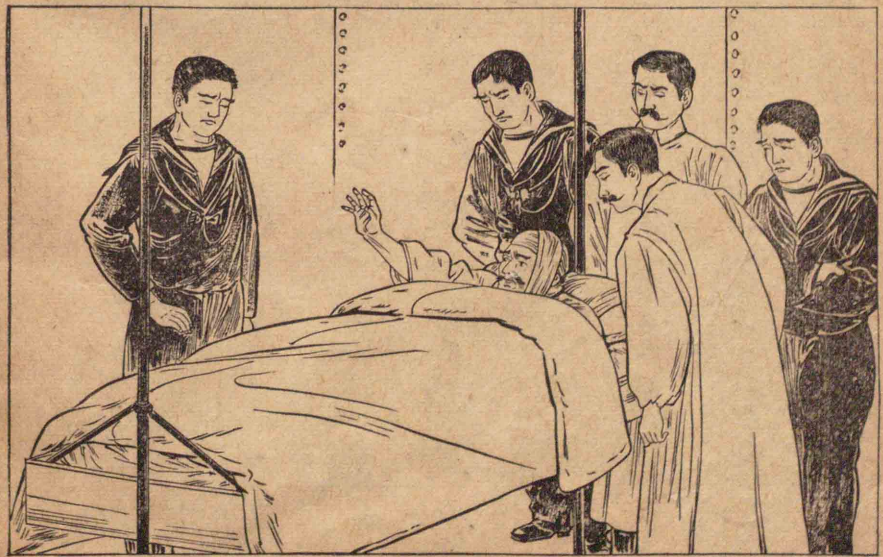
玉ミガカザレバ光ナ

シ。人^{マナ}學バザレバ智^チナシ。

第七 友だちはたすけあへ

海軍^{かいぐん}一とうすゐへい坂井^{さか}定三^{ぢやうざん}郎は、^{らう}ぐんかん
にゐた友だちがべんきやうのために^{おほさか}大阪へ
行つたので、自分のきふれうの中から^{めいぢ}時時金
をおくつてたすけてやりました。明治^{めいぢ}三十八
年五月、日本海のいくさのあつた少し前にも、
金をおくらうとしましたけれども、つがふが
わるかつたので人からかりておくりました。

間もなく定三郎はいく
きに出ておもいきずを
うけました。とてもたす
かるまいと思ひました
ので、そばにゐた友だち
に、かりた金のしまつを
たのんで、それきり氣が
遠くなつてしまひまし
た。しばらくすると、には



かに大きなこゑで大阪の友だちの名をよび、
「しつかりたのむぞ。」といつて、そのままなくな
りました。

第八 ばんのぶとも 身體 しんたい

伴信友はつねにけんかうに心がけました。毎
日朝おきた時と、夜ねる時に姿勢 しせい をただしく
してすわり、三四十ぺんもしんこきふをし、又
毎朝つめたい水であたまをひやしました。そ
の外、朝ばん弓を引いたり、はをつぶした刀を



ふつたりして、よくうんどうしました。かやうに信友は身體をたいせつにしたので、年をとつてもちやうぶで、たくさんの本をあらはすことが出来ました。

すべて身體をちやうぶにするには、姿勢に氣をつけ、うんどうをおこたらず、着物はせいけつにして、あつ着や、うす着にすぎないやうにし、ねむりとしよくじは、きそくただしくしなければなりません。又からだをきたなくしておくとびやうきがおこりやすく、うすぐらい所で物を見ると目をいためます。

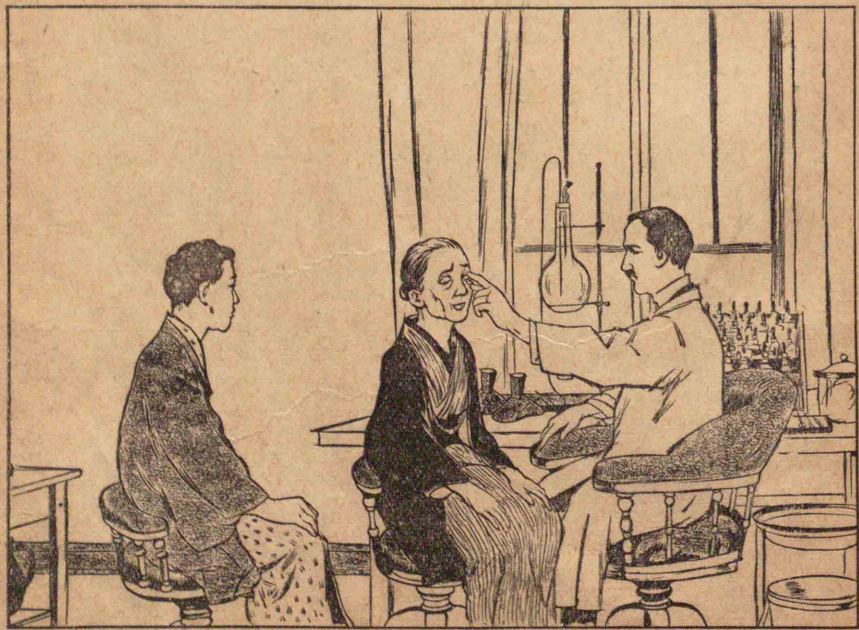
第九 めいしんにおちいるな

ある町に目をわづらつてゐる女がありました

た。めいしんのふかい人で、かねてある所のお
水が目のやまひによいといふことを聞いて
みたので、それをもらつて來てもちひました。
けれどもやまひは日日おもくなるばかりで、
何のしるしも見えませんでした。

ある日しんるるの人が見まひに來て、おどろ
いて、むりにおいしやの所へつれて行つて見
てもらはせました。おいしやはしんさつをし
て、「これははげしいトラホームです。右の目は

手おくれになつてゐ
るので、なほすことは
出來ません。左の目は
まだ見こみがありま
すから、しゆじゆつを
して見ませう。これも
今少しおくれたら、手
のつけやうもなかつ
たでせう。」といひまし



た。その後しゆじゆつをうけたおかげで、左の目はやうやうなほりまりましたが、その女は「自分のおろかなため、だうりに合はないことをしんじて、まつたくのめくらにならうとしました。おそろしいのはめいしんでございます。」とつねづね人にはなしました。

第十 よい習慣しふくわんをつくれ

よい習慣をつくるにはつねに自分をふりかへつて見て、よいおこなひをつとめ、わるいお

こなひをきけなければなりませた。瀧たき鶴かく臺だいの妻つまがある日たもとから赤いまりをおとしました。鶴臺があやしんでたづねますと、妻はかほをあかくして、「私はあやまちをしてこうくわいするこ



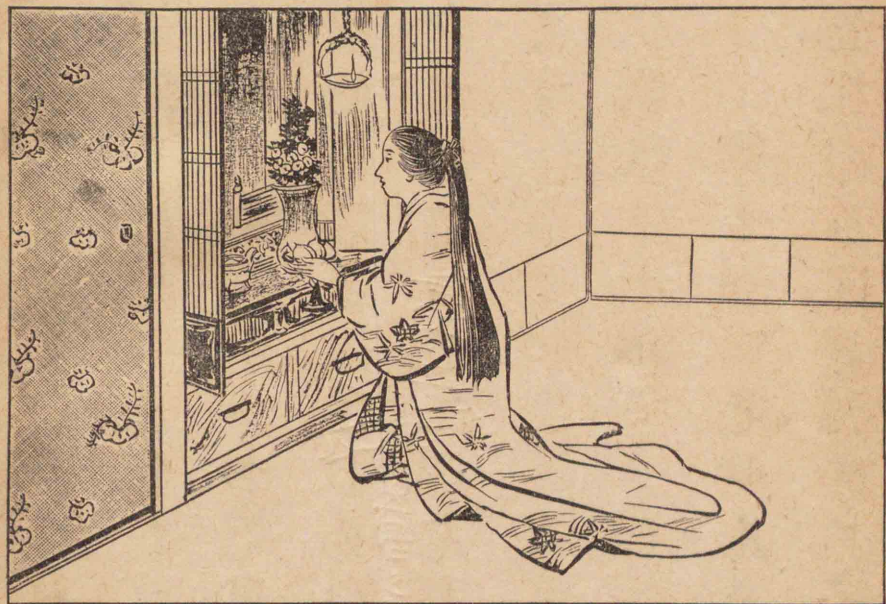
とが多うございます。それであやまちを少く
しようと思ひ、赤いまりと白いまりを作つて
たもとへ入れておき、わるい心がおこる時に
は、赤いまりに絲いとをまきそへ、よい心がおこる
時には、白いまりに絲をまきそへてゐます。は
じめのうちには赤い方ばかり大きくなりまし
たが、今ではりやうはうがやつとおなじほど
の大ききさになりました。けれども白いまりが
赤いまりより大きくならないのをはづかし

く思ひます。』といつて、べつに白いまりを出し
て鶴臺に見せました。
自分をふりかへつて見て、よいおこなひをつ
とめることは、はじめはくるしくても、習慣と
なればさほどにかんじないやうになるもの
です。

習性ナレヒセイトナル。

第十一 そせんをたつとべ

稻生いなふはるは毎月一日十五日、その外そせんの



忌日きにちには朝早くから
 おき、からだをきよめ
 て、ぶつだんのさうぢ
 をし、花をささげ、かう
 をたき、いろいろそな
 へ物をして、つつしん
 でお祭をしました。も
 し人からめづらしい
 くだものなどをもら

ふことがあると、きつとぶつだんにそなへま
 した。

第十二 ぎやうぎ

松平好房まつだいらよしふさは小さい時からぎやうぎのよい人
 で、自分のゐまにゐてもかりそめにも父母の
 居られる方へ足をのばしたことはありませ
 んでした。よそへ行く時は、そのことを父母に
 つげ、かへつて来た時は、かならず父母の前へ
 出て、その日あつたことをはなしました。父母

から物をもらふ時は、
ていねいにおじぎを
してそれをうけ、いつ
までもたいせつに持
つてゐました。又人が
好房の父母のはなし
をすると、かならずぎ
やうぎよくゐなほつ
て聞きました。



複し三四

シタシキ中ニモレイギアリ。

第十三 人の名譽めいよをおもんぜよ

昔京都きやうとに伊藤東涯いとうとうがいといふがくしやがありま
した。江戸えどの荻生祖徠おぎふそらいと相對あひたいして、ともにひや
うばんが高うございました。

ある日、東涯のをしへをうけて居る人が、祖徠
の書いた文を持つて来て、東涯に見せました。
その場に外のでしが二人居合はせました。が、
これを見てひどくわる口をいひました。東涯



はしづかに二人にむ
かつて「人はめい／＼
かんがへがちがふも
のである。かる／＼し
くわる口をいふもの
ではない。ましてこの
文はりつばなもので、
外の人とはとてもおよ
ばないであらう。」とい

つて聞かせたので、でしどもはふかくはぢ入
りました。

第十四 くわんごう 皇后陛下

皇后陛下はお小さい時から、きまりよくあら
せられました。おもちひの御品は大切にお取
りあつかひになり、御じしんで御せいとんに
なりました。又御學問や御うんどうなどの日
日の御きまりはたゞしくおまもりになつて、
けつしてそれをおたがへになりませんでし



た。
陛下は又大そうおやさしく
あらせられ、人々をおあはれ
みになりました。まだ久く通の宮家みやけに
あらせられた時、ある夏、地方
に御りよかうになりま
した。その時大ぜいのせ
いとがお出むかへ申し

てゐるのをごらんになつて、「さぞあついでせ
う。」とおほせられて、「おやさしくおいたはりに
なりました。又大正十二年にくわんとうに大
ぢしんがあつた時、さいなんにあつた人たち
を氣のどくにおぼしめされ、御じしんでたく
さんの着物をおぬひになつて、こまつてゐる
人たちにたまはりました。

第十五 皇室くわうしつをたつとべ

昔わ和氣清麻呂けのみよまろといふちゆうぎな人があります

した。その時道鏡だうきやうといふ僧そんが高いくらゐに
ましたが、道鏡にへつらふ者が、時の天皇に「う
さはちまんの神が、道鏡を天皇の御くらゐに
つけたなら、天下太平たいへいであらうと御をしへに
なりました」と申し上げました。天皇は大そう
御しんぱいあそばされて、清麻呂に「うさへ行
つて今一度神の御をしへをうけたまはつて
まゐれ」と御いひつけになりました。
道鏡は清麻呂をよんで「自分が天皇になれた

なら、おまへに高い
くらゐをさづけよ
う。」と申しました。清
麻呂はうさへ行つ
て神の御をしへを
うけ、やがて歸つて
来て、天皇の御前へ
出て、道鏡の聞いて
居るのもおそれず、



「臣下のみぶんで天皇の御くらゐをのぞむやうな者は早くのぞけとおつけになりました」と申し上げました。

第十六 能久親王

能久親王北白川宮は明治二十八年五月、たいわん臺灣のぞく軍を御せいばつなさるために、かの地へおわたりになりました。おつきになつても、おやすみになるやうな家がないので、砂の上ござしよにまくをはり、そまつないすをおいて御座所とし

ました。又御しよくじにはきつまいものむしやきをさし上げました。それからだんく軍をお進めになりましたが、へいしとともに大そう御なんぎをなされ、御病氣におなりになつても、少しもおい



とひなされずおさしづなさいました。
ぞくはたいていたひらぎましたが、南の方に
まだのこりのぞくがゐりましたので、その方へ
お進みになりました。そのとちゆう、又御病氣
におかゝりなさいました。ぐんいは「おとゞま
りになつて御やうじやうあそばしますやう
に。」と申し上げましたが、親王は「わがみのため
に國の事をおろそかにすることは出来ぬ。い
きのあるかぎりはつゞける。」とおほせられ、き

複し三四

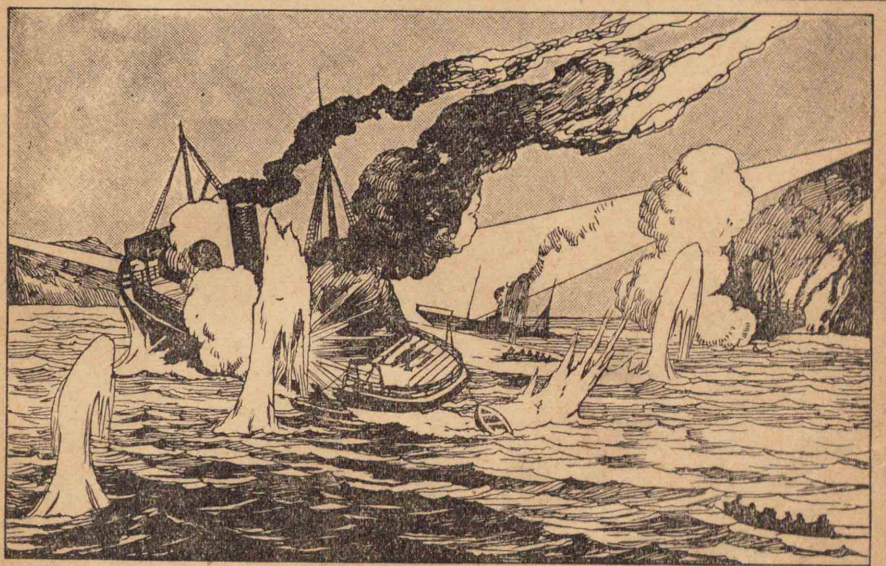
複し三四

ゆうくつなかごにのつてお進みになりました。
た。

親王はかやうに國のためにおつくしになり
ましたが、かなしいことには、御病氣がおもく
なつて、間もなくおかくれになりました。

第十七 ちゆうくんあいこく

明治三十七年わが國がロシヤといくさをし
た時、わが國のかんたいは、てきのぐんかんが
旅順りよんから出られないやうに、きせんをしづめ



て、みなと口をふさぎま
 した。これは大そうあぶ
 ない仕事でありました
 が、三度までおこなつて、
 思ひ通りにしとげまし
 た。それをおこなつた人
 たちはちゆうぎな軍人
 ばかりであつたから、く
 らい夜中に、みなと口へ

複乙三四

複乙三四

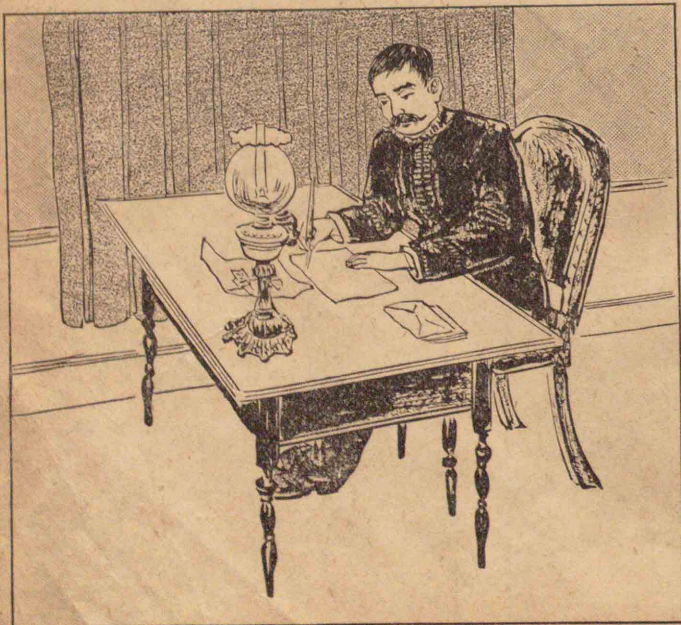
進みてきのたいはうのたまの中で、いさまし
 くはたらきました。中でも海軍かいぐんちゆうさひろせ廣瀬
 武夫たけをのはたらきはりつばなものでありまし
 た。ちゆうさはやみ夜にきせんにつて出か
 けました。てきのうち出したいはうのたまが
 雨あられのやうに降りそゞぐ中でいさまし
 くはたらいて引上げようとしたが、杉野
 へいさうちやうがゐませんから、「杉野」杉野と
 よんで三度もふねの中をたづねまはりまし

た。いよくゐないので、ボートにのつて歸りかけた時、ちゆうきはたいはうのたまにあたつてせんしをとげました。

第十八 やくそくをまもれ

廣瀬武夫がロシヤへ行く時、ある子どもに「歸りにはロシヤのいうびん切手をたくさんみやげに上げよう。」とやくそくしました。武夫はロシヤから日本へ歸る道で、大そうなんぎな所を通ることになりました。その前の

夜、武夫はやどやで、「もしもぶじに歸れなかつたら、いうびん切手をまつてゐる子どもは、どんなにかおとしをするだらう。」と思ひました。それで、すぐにその子どもにあてた手紙を書いて、ロシヤのいうびん切手を入れ、それを自分の兄の所へ



おくつて、「もし私が死んだら、この手紙を子どもにとづけて下さい。」とたのんでやりました。

第十九 あやまちをかくすな

まっだらのぶつな松平信綱はしやうぐんのやしきではうばいとたはむれて、大切なびやうぶをやぶりました。間もなくしやうぐんがそこを通りかゝり、「これはだれがやぶつたのか。」ととがめま



複し三四

した。信綱は「私がやぶりました。」と少しもかくさず申し上げておわびしますと、しやうぐんはかへつて信綱がしやうぢきであやまちをかくさなかつたのをほめました。



第二十 おんをわすれるな

四十四
永田佐吉は十一の時美濃の竹鼻たけがはなから尾張おわりの名古屋なごやへ出て、ある紙屋にほうこうしました。佐吉はしやうちき者で、よくはたらきますから、しゆじんにかはいがられてゐました。又ひまがあると學問をしてたのしんでゐました。はうばいの者どもが佐吉をねたんで店から出してしまふやうにしゆじんにせまりました。しゆじんはぜひなく佐吉にひまをやりました。

複乙三四



佐吉は家に歸つてから、なかゞひなどをしてくらしを立ててゐましたが、しゆじんのおんをわすれないで、道のついでには、きつとたづねて行きました。その後紙屋はおとろへましたが、佐吉はをりく見まつて、物

四十五

をおくり、くらしのたすけにしました。

第二十一 はふれい 法令をおもんぜよ

昔ギリシヤの大がくしやソクラテスはいろ
いろ國のためにつくし、又わかいい人たちにた
だしい道ををしへました。ところがソクラテ
スをにくむ人々にう
つたへられて、とうと
う死けいをいひわた
されました。でしのク



復乙三四

復乙三四

リトンはらうやへめ
んくわいに行き、つみ
もないのに死ななけ
ればならない。だうり
はありません。今らう
やをにげ出すしかた
があるから、すぐにおにげなきさい」といつて、し
きりにすゝめました。ソクラテスは「自分は今
まで國のためになんか悪い道をふんで来たか



ら、今になつてそれをやぶることは出来ない。
國法こくはふにそむいて生きてゐるよりも、國法をま
もつて死んだ方がよい。といつて、おちついて
ゐました。

第二十二 共同きょうどう

ある時毛利元就まうりもとなりはその子の隆元たかもと元春たかかげ隆景の
三人に一つの書き物をわたしました。その中
に、「三人とも毛利の家を大切に思ひ、たがひに
少しでも、へだて心をもつてはならぬ。隆元は

復し三四



二人の弟を愛し、元春あい
隆景はよく兄につか
へよ。とありました。又
隆元へべつの書き物
をわたして、「あの書き
物をまもりとして、家
のさかえをはかれよ。」
とねんごろにいまし
めました。それで、兄弟

は一しよに名を書きならべた請書うけしよを父にさし出し、「三人共同して、御いましめをまもりま

す」とちかひました。その後隆元は早く死んで、その子の輝元てるもとが家をつぐことになりましたが、元春隆景はよく元就のいましめをまもり、心をあはせて輝元をたすけたので、毛利家は長くさかえることになりました。

第二十三 ころえき

昔羽後うごの海べの村々では、暴風ぼうふうが砂を吹きとばして、家や田をうづめることがたび々ありました。栗田くり定之丞ただのじやうといふ人がある郡の役人であつた時、その害がいをのぞかうといろくくふうしました。まづ海べの風の吹く方に、わらたばを立てつらねて砂をふせぎ、そのうしろに、やなぎやぐみの枝をさゝせましたら、皆めをふくやうになりました。そこでさらに松なへの苗木をうゑさせました。それがしだいに大



きくなつて、つひにり
つばな林になりました
た。

その後定之丞は外の
郡の役人になりました
たが、そこでもこの事
を土地の人にすゝめ
ました。はじめははげ
しいはんたいをうけ



たけれども、いろくときとし、自分がさきに
立つてはたらいたので、また松林がしげるや
うになりました。

定之丞は十八年の間もこの事にほねををり
ました。そのためあはに風や砂のうれへがなくな
つて、あは粟粟などのあははたも所々にひらけ、又しよ
うろや、はつだけでも生ずるやうになりました。
この地方の人々は今日までもそのおんをあ
りがたく思ひ、定之丞のために粟田神社とい

ふ社やしろを立てて、年々のお祭をいたします。

第二十四 じぜん

昔羽前うぜんの鶴岡つるをかに鈴木すずき今右衛門いまえもんといふじぜん
の心のふかい人がありました。大き、んのあ
つた時、田はたをはじめ家のだうぐまで賣つ
て多くの人をたすけました。今右衛門の妻も
心だてのよい人で、ほどこしをするために、着
物るゐを賣りはらひ、はれ着が二枚だけのこ
つてゐましたが、着がへがなくなつて外へ出

ることが出来なければ、くしや、かんざしの
入用もありません。こ
れらの物を金にかへ
てもつと多くの人を
たすけませう。といつ
てはれ着とともに、く
しかんざしも、皆賣つ
てしまひました。



今右衛門ふうふに十二になるむすめがあり
 ました。あるさむい日おなじ年ごろの女の子
 が物もらひに來ました。母はそれを見て、むす
 めに「あの子はひとへ物一枚でふるへてゐま
 す。おまへの着てゐるわたいを一枚やつて
 はどうです。」といひましたら、むすめはすぐに
 上に着てゐるよい方をぬいでやりました。
 ワガミヲツメツテ人ノイタサヲ知レ。

第二十五 よい日本人

複し三四

複し三四

われらはつねに天皇陛下くわうぎやう皇后陛下の御おん
 をかうむることのふかいことを思ひ、皇室を
 たつとび、ちゆうくんあいこくの心をはげみ、
 法令はふれいをおもんじ、君のため國のために、臣民しんみんの
 つとめをつくさなければなりません。
 又おやのおんのふかいことを思ひ、父母に孝
 行をつくし、そせんをたつとび、兄弟なかよく
 し、しんるゐの人によくまじはらなければな
 りません。

友だちにはしんせつにしてたすけあひ、人にまじはるには、人の名譽めいよをおもんじぎやうぎをよくし、あやまちをかくさず、やくそくをまもり、人からうけたおんをわすれず、人と共同きょうどうし、こうえきに力をつくし、じぜんの心もふかくなければなりません。

その外、學問にせい出し、めいしんにおちいら
ないやうにし、身體しんたいのけんかうに氣をつけ、仕
事をはげみ、よい習慣しふくわんをつくらなければなり

ません。

われらは上にあげた心えをまもつてよい日
本人とならうとつとめなければなりません。
けれどもよい日本人となるには、多くの心え
を知つて居るだけではなく、至誠しせいをもつてよ
く實行じっかうすることが大切です。至誠から出たも
のでなければ、よいおこなひのやうに見えて
も、それは生氣せいきのない造花ぞうわのやうなものです。

をはり

昭和八年二月廿四日翻刻印刷
昭和八年三月廿四日翻刻發行

尋常小學校修身書
複式編制學校第三、四學年兒童用乙

定價金七錢
ほ

著作權所有

著作兼
發行者

文
部
省

昭和八年二月廿七日
文部省檢査濟

翻刻發行
東京書籍株式會社
代表者 石川正作

印刷所
東京市小石川區指ヶ谷町百三十六番地
東京書籍株式會社工場

發行所

東京市小石川區指ヶ谷町百三十六番地
東京書籍株式會社

広島大学図書

2000018266

